



ろう幼児との生活の中から

吉成 明 美

ろう学校では、「ろう」または難聴のこどもたちが、その言語的障害を考慮された特殊な教育を受けている。普通の小学校、中学校、高等学校それぞれに対応した学年構成がなされているが、一学級6〜10名位で、教師の顔がよく見えるように半円形に坐って勉強している。

言語指導の時期は早いほどよいとされているので、小学部の下に、さらに幼稚部が設けられている学校がある。幼稚部では、小学部に進む前のこの段階の間に、言語的遅滞を取りもどして、小学部一年生からは、普通の教科書を用いて、普通の小学校一年生の教育内容に対応した学習をする

ことができるまでに教育することを、大きな目的としている。それゆえ、いうまでもなく、ろう学校の幼稚部では、耳のきこえないこどもたちに、いかにして言語力をつけるかが中心課題である。

幼稚部の教育内容は、普通の幼稚園で行なわれている保育内容をもとにして、これに特殊な言語教育面が考慮されているものである。殊に、最も幼い3・4歳のこどもの場合、言語指導に重点をおいた保育の他に、視覚、聴覚、触覚などの感覚を鋭くするための知覚訓練、話し手の口の動きからことばを読みとる力を養う読話訓練、また正しい声の出し方、口の動かし方、息の使

い方などを教える発語指導などが、個別に指導されている。

しかし、ことばを育てていくことは、単に直接的なことばの指導だけでは期待できない。直接的な言語指導の問題以前に、まず、こどもの頭の中にことばを育てること、つまり、内語、受容言語をより多く育てておくことが要件とされる。これらは、ろう幼児に、直接的な経験を少しでも多くさせていくことによって蓄積されるものである。幼いうちにこの課程を経ることの重要性が、最近ますます重要視されてきている。

さて、ここでは、この学校で特に自分の担当している3・4歳のろう幼児の生活の中から、直接関係している部分を通して、いくつかの問題点を考えていきたいと思う。

△自由あそびの場で▽

自由あそびの場面で目立つことは、やはり、具体的な遊具を媒介にしたあそびがほとんどであるということである。「ままごとあそび」をしたり、積木を動かしたり、砂場で汽車を走らせたり、砂のお山を作っ

たりすることは非常に活発だが、「おにっこ」、「かくれんぼ」、「かごめかごめ」などのように、ある約束であそぶようなあそびはあまり行なわれない。目で見ることができ、触れることができる遊具は彼らにとって確かなものであり、自分ひとりだけでもそのあそびに没頭できる。が、話し合いや、相手の声を仲介にしなければならぬあそびは興味をつないでおく力がないのだろう。具体物によるあそびでも、個人個人がばらばらなことをしている場合が多く、年令を考慮してみても、関連をもったあそびに発展することが少ないように思われる。

彼らにとっては、あそびはすべてお互いが正面向きでいる場面にだけ成り立っている。砂場で苦勞をしてトンネルをつくり、汽車を通させる。これを見ていたことは、自分もよるこんで汽車を通して仲良くあそべる。しかし、すぐ前にいても、汽車を通すのを見ていなかったことは、このトンネルが何であるかを知らずに無惨に気づしてしまう。このような場合に、しなく

ともよいけんかが多くおこるのである。あつてもがある「つもり」ですることに対して、他のことはその「つもり」になれない。使うつもりで持ってきたおもちゃを、他のことも使おうつもりで取る。ここに説明や言訳がきかないので、結局力の強い者が獲得することになってしまう。けんかをして泣いている子がいても、痛くされたところ、けんかのもとになったおもちゃは子どもの様子からわかったとしても、どちらが先にどうして起ったものか、その間の説明は得られない。このようなことは、普通児の場合もよくありがちなことと思うが、それが非常に多いのである。

ことがらの理由、程度を理解させることも困難である。こどもに示される事柄は、良いか悪いか、正しいか誤っているか、など二つの極に限定される場面が往々にしてあるので、その間に程度の大きな巾があることや、どれでもよい場合であること、どちらでもよい場合であることなどを理解させにくいことも多い。

毎日の生活は習慣として行なわれる部分

が多いのであるが、これは一応生活をスムーズにしている。しかし日々の生活には偶発事も多い。それに対処するためにも躰けられていることは反対のこと、異なつたことも、時にはやむを得ずこどもに強要されることがある。その事態が緊急の場合など、普通児の場合のように、その場で話して説明してやることもできないので、こどもは、抵抗をこそ感じるだろうが、納得せぬままに終ることが多い。場合による臨機応変の態度をとることを理解させにくいのである。

△リズム活動の場で▽

ろう児は、普通児が曲をきいたり、うたをうたったりすることや、自然音から、おのずとリズム感を身につけるようなわけにはいかない。しかし、ことばにもリズムがあるように、これは欠くことのできない要素である。

床にねて太鼓のひびきを感じとったり、大きく拡声されたレコードをきいたり、ピアノに腹、胸、頭、牛などをつけて、そのひびきを感じとったりする。このように触

覚で振動をとらえたり、視覚の助けをかりてリズム感を養っていく。むろん、普通児と程度は違うが、よろこんでうたをうたうし、楽器を扱うこと(主として簡易打楽器)や、ゆうぎをも非常に好んでいる。

△絵画製作活動の場で▽

この領域に属する活動は、ろう幼児たちの生活の中でも、最も抵抗の少ないものである。ただし、それは、ある定まった課題を個人として行なう場合のことである。

そして同時に、この活動の中にこそ、ろう児の自発性の乏しき、模倣性を如実にみるのである。ろう児の言語学習は模倣が基礎条件となっている。

そして、その態度で絵画製作の場にもその傾向が強い。自由画を描けば、他児の真似や、教師のささいな行動に暗示されてしまうことが多い。時々、自発的におもしろい絵を描いたり、工夫したりするのを見るときには、ほっとしてうれしくなる。そして、こどもたちの前でその子をほめてやると、それを教師の指示と受けとるのか、また他児がその子の真似をしてしまうことが

ある。

また一方、ものによっては、ある目的をもった課題を与えて、ある程度までは教師の意図に沿った作業してもらわないと困ることがあるが、その場合、こちらの意図を十分納得してもらうことも難しい。

つまり、活動の中には、本当に自由に表出してほしい場面と、教師の意図に沿ってもらいたい時とがあるのにもかかわらず、その程度を理解してもらえない場合がしばしばである。自発的表現は、何か以前になされた類似の経験に影響されて限定されてくる恐れがある。このことは、リズム活動のときにもよく考えさせられることで、自由表現を行なわせにくい点である。これらは、環境、場面の設定、導入の仕方に工夫を要する大きな問題であると思う。

一般に、幼児の描く絵は我々がみて理解に苦しむものが多いし、また、幼児の方でも、自分で描いてから、その形によって意味づけをする場合が多い。ろう児の場合も同様であるが、折角説明してくれようとするが、こちらには理解できないことの方が

多い。それゆえ、普通、幼児がよくするようなことが、例えば、話し合いをしてから遊びの道具を自分たちで作って使うことなどもできにくい。作った本人にだけわかっている、他人にはほとんど通用しないからである。しかもことばで補うことができないからである。そこで、すべてのこどもが見てわかるように、教師の側から与えるべく用意された絵などがどうしても多くなってしまうのである。

あそんでいたりと、絵を描いている時に、よく教師に話しかけてくるこどもがいる。教師も、その時の状況、表情、手まねなどを参考にして、その子の口を読もうと努力するのだが、母音が強くひびくことばがどうしても理解できないことが多い。(例えば、「バケツ」は「アエウ」ときこえる。)こどもは何度も試みるが、そのうちに絵を描いてみせる時もある。それでも教師にわかってもらえない時、こどもはがっかりする。そして、教師も悲しくなってしまう。

しかし、ほとんどことばをもたない幼いこどもたちが、朝、スクール・バスで学校

へ来てから、一日の課程をとにかく終えて帰っていく。思えば不思議な気がするが、手をふって帰っていく子どもたちのパスを見送りながら、大過なく過ぎたこの一日の間が、はたして彼らなりに納得できたものであったらどうか、彼らの気持を十分汲んでやることができたかどうか、楽しい一日であったように、と願わずにはいられない。子どもたちの表情は明るく、活発で、暗いかげはみられない。

このような子どもにとっては、それを囲む環境の重要さは、普通児の場合以上である。物的環境は勿論のこと、ろう児を含めた人間関係の調整が、より大切であろう。直接子どもに働きかける教師の態度は、ことばによるより、じかに触れあう関係である以上、子どもに大きな影響を及ぼさずにはおかない。幼児教育者は情緒的な人でなければならぬというが、特殊な子どもの場合、このことはなおさらだと思ふ。しかし、同時に、子どもの教育に熱心のあまり、子どもを引きづられて後を追いかけるという、よくある事態におちこまないだけ

の客観的目をもっていなければならぬと思ふ。このことは非常に大切なことだと思ふ。教師も自分の歩みをしっかりと進め、常に新鮮なひろい目と態度をもつてのぞまなければならぬことを痛感している。子どもを単に対象として扱うことより、子どもと教師、子どもと子どもの関係をどのように育て、調整していくかという点に留意していくことこそ、大切であると思ふ。

関係の重要性は、母親と子どもの場合では、さらに問題が大きくなる。母親が子どもの教育におぼれて自分を見失っている場合をよく見る。母親の情緒が安定して、自分の歩みを進める時に、母親の側に、子どもとの関係に対する洞察が生まれ、その関係が発展していくものと思ふ。家庭のいろいろの事情から、母親自身に、さらに、子どもとの関係に暗いかげを投げかけている例をしばしばみる。このような事態は、その子どもの教育に最大の弊害となつていゝ。家庭環境は教育と密接な関係をもつていゝものである。

母親の洞察を助けるのには、教師のとる

役割は大きい。子どもと母親と教師の関係を常に発展させていくことが教育の基礎条件であろう。

普通児と比較して、聴力にハンディキャップがある以上、経験の上でも欠ける面が大きいことは明らかである。これに対する機能補償について研究が進められなければならない。

音楽によって培われるべき情操は、視覚教材の工夫によって少しでも補われなければならない。また、子どものあそびそのものについて研究を深め、あそびの中にコミュニケーションの場を多く用意し、さらに、人間関係への洞察を深める体験の機会、環境認知の能力を深める場を意図的に用意することが、生活指導に役立つものである。このことが、言語を育てる基盤となつていく。

この面では、ブレイ・セラピーが必要とされる。「サイコ・ドラマ」や「ロール・プレイング」など、自発性を育てるものとして、今後の成果に期待するところが大きい。

(東京教育大学附属ろう学校幼稚部)